



矢島 渚男 選

担任も雁齋物理学を説く

京都市 根来美知代

【評】雁齋というデキモノは多く足にでき、随分かゆいものらしい。難解な授業だと先生は観察の対象になるから、動作でわかる。雁が来てから去る頃までかかる皮膚病というから、大変風流な病名だ。

草相撲里の山川みな四股名

四街道市 須崎 輝男

【評】草相撲の力士たちが立派な名前。それは村の山や川の名前だという。最近、大相撲の四股名は難しく凝り過ぎの傾向。単純がいい。あと五分まぶたの中で秋の朝

豊中市 谷口ゆう子

【評】もう五分だけ、眠らせて下さいと、折るような気持ち。「まぶたの中で」の省略が秀れて面白い。さらさらと朝風夜風やと秋

横浜市 宮川 ゆず

長崎は路地も坂道いわし雲

甲府市 戸沢 茂紀

はっけよい子泣き相撲や郷くんち

長崎市 前田 尚人

残るのか残らないのか秋燕

京都府 山田 国雄

大皿に盛る満月の祭りかな

仙台市 松岡 三男

寄ってたんせ子等と呼ばるる地蔵盆

蓮田市 飛田多恵子

葛の花村史に残る頌徳碑

都留市 野中 定代

高野ムツ才 選

球面のどこも真ん中中高し

神奈川県 中島やさか

【評】秋晴れのもと、岬や船上で水平線を見渡した時、地球は丸いと実感する。同時に地球に生きる誰にとっても、立つその場こそがそれぞれの中心なのだ確認している。競ふかに跳ねて銀鱗天高し

西宮市 平田 あい

【評】河口なら鯉だが、餌に群がる池の鯉でもよい。中七の弾むようなリズムが命の躍動を伝え、澄み切った秋空がそのさまを褒め称える。お互ひに歳憂めあひて登高す

千葉市 笹沼 郁夫

【評】「登高は危除けのため、山に登って菊酒で祝うこと。『お互ひに』という丁寧な表現に長寿そのもののへの感謝がこもっている。計画の半分くつれめる残暑

香川県 福家 市子

樹の上を鳥その上を秋の風

北本市 萩原 行博

水澄むと鵜尾の金色ゆるびなし

津市 中山 道春

介護士に母を任せて晩稲刈

志木市 谷村 康志

年寄りの干し物低し鶏頭花

東京都 吉田かずや

初アト一直線の爽やかさ

東京都 藤ヶ谷寿一

月が出るただそれだけの話して

水戸市 大野太加し

正木ゆう子 選

ビルマつて何処よと孫が洗ふ臺

相模原市 荒井 篤

【評】ビルマで亡くなったのは作者の父。孫にとっては曾祖父にあたる。たった数十年の間に国名は変わり、戦争の記憶も薄れた。孫の素直な言葉遣いが、時の流れを見せつける。夏掛をひしとまとへる一夜かな

大阪府 池田 寿夫

【評】ああ今年はそんな夜があったと誰もが共感するだろう。猛暑のあけく急に冷え込んだ夜中。薄い夏掛を体に巻き付けて寝た。中七がいい。二百十日の字結びの届け物

生駒市 高橋 裕樹

【評】台風の襲来しやすい二百十日と、厳重な荷造りとが、即かず離れず、的確な取り合わせ。ガムテープに頼って、最近はやりの字結び。つまべにや思ひのほどの種とはす

宮崎市 長友 聖次

月光や波間の奥に深き闇

つば市 横田 和己

霊峰はむらさきにして鷹渡る

霧島市 尾上 春風

みやくみやくと血は全身へ真葛原

豊中市 ミキユキコ

醉芙蓉白にはじまるひと日かな

名古屋市 渡辺 淳子

涼風の抜けゆく路地や伸子張

豊中市 土井 淳子

木屋の降りそむ庭を継ぎにけり

市川市 佐藤 詩子

小澤 實 選

ノーベル賞譲つておくか焼秋刀魚

名古屋市 山内 三雅

【評】ノーベル賞は最高の賞で、賞金もすごい。受けることさまたま面倒もあるだろう。それよりこは眼前に横たわっている焼き上がった秋刀魚をいたなくしよう。夜食なりまづ一杯の熱きお茶

茅ヶ崎市 古田 哲弥

【評】夕食のあとの作業を経ての食事。熱き茶を一杯飲んでいた。ほろけ茶だろうか、その熱さにねぎらいの思いも感じられる。長き夜の湯呑の酒と小津映画

東京都 石川 昇

【評】湯呑に入れた常温の酒をゆっくりと飲みながら、小津安二郎監督の古い映画をじっくりと楽しむ。なかなかの長き夜の過ごし方だ。栗拾い熊撃退のスプレー持ち

相模原市 相模湖福幹

芋煮せり消防支署に文書出し

松江市 三方 元

廊下の灯点滅止まぬ夜学かな

横浜市 塚本 文武

目礼に応へ目礼草の花

霧島市 秋野 三歩

離島慶良間の滑走路草紅葉

川崎市 石田浩二郎

お互ひに歳は問はずや夜学

大津市 星野 暁

鮭死んで屍白きや川の底

小山市 松本 喜雄

怖いくせに

堀本裕樹 (俳人)

俳句あれこれ

「ちょっと来て！」という家族の声がすると、ああ、また出たなと思う。この家は公園の森に隣接しているのによく虫が出るのだ。ムカデやカメムシが室内に出ると、捕獲要員として呼び出されるのである。それらはいいたい季節語になっているが、妻と五歳の娘に「早く、早く」と駆除を急ぎ立てられると、悠長に一句詠むなんてできない。「ちょっと来てみ！」この前は僕から妻と娘を呼び出した。雨戸を閉めようとしたら、でかいアシダカグモが闖入したのだ。すぐさま二人は飛んできて、「わああ！」と驚嘆した。怖いくせに見たいのだ。クモは長い脚を器用に使い、壁を伝って素早く逃げる。僕は捕虫網を使つて何度も取り逃がしながら、やつのことで捕まえた。二人に見せようと近づくと、悲鳴を上げて逃げ惑う。脚が一本挽けたクモを僕は哀れに思いつつ、闇夜の庭に逃がした。△夜の庭に鳴かざる蜘蛛を放ち秋 裕樹



題字デザイン・イラスト 福田美蘭